

六月二八日

昨日から十勝。ヘレンケラー記念塔現場。外部は完璧なんだが、内部の工事が遅々としてすすまない。どうした事か。スタッフの貼付けもそろそろ限界に来ているので手を打たねば。檜垣には申し訳ないがもう少し残ってもらい、倉本他は引き上げさせよう。3月から4ヶ月よく頑張った、と言うか、良く居続けたと思う。

このスタイルは続けたい。宮崎の現代っ子ギャラリーもそうだったが現場に貼り付いて建築を作ることが、どれ程人間を成長させるか計り知れぬものがあるのだ。それにこの建築はそうしなればできなかった。

私も若かった頃菅平の開拓者の家でそう言う体験をした。現場に通い続けて気が付いたら十年程の歳月が経っていた。あの体験が私に何を与えたか。あるいは何を失わせたのか。失ったものはハッキリしている。金のために建築を作る心構えだ。これは多分とても大事なことで、今はつきつめて言わない。金のためにはなく建築を作るとはどういうことなのか。菅平の農家の仕事では、最初にもらったわずかな設計料の他に金は一銭も貰わなかった。毎年、菅平からトラック一台分ほどのレタスや、豆や、何やらが送られてきて、どうやらそれが私の労働に対する報酬なのであった。それが満足だった。作りたいモノを作りたいように作らせて貰っているのだから、銭金の問題で動くのではない。そう言う風に割り切っていた。銭金は他のもつとボロイ仕事でかせいでいた。

それはそれで良かった。

今は年をとって、もう少し賢くなった。工事金額の全てをあつかつて、その中で裁量すれば良いと決めた。

ヘレンケラー記念塔はそれへの準備飛行なのだ。

どうしても設計者がやりたい事。それがあればその部分は設計者の設計施工でやれば良い。それが建築の全体であるならば全部自分で作れば良い。コレは意外に簡単なことだ。ヘレンケラー記念塔は原則として全て分離発注をした。その事で様々な事を学んだ。

聖徳寺の計画は全ての工事を請負うつもりだ。檜垣には造園工事一式を請負わせる。その為に十勝で四ヶ月、工事の諸々を体験させたのだ。

産業としての建築ではない概念。B・フラアのドーム理論のような、C・アレキザンダーのアーキテクト・ビルダー理論のような、チャールズ・イームズの自邸での試みにも似た。それ等の試行を全て横つなぎにするような、そうしてそれを産業としての建築に全て対抗させる戦略。その要は何か。

今朝は現場でその事を話してみたい。

最終便で東京へ。

何とか外構工事の全てのポイントを押えた。アプローチの土盛りの高さ形状も決める事ができた。アトは運を天に任せるしかない。90%は完全にコントロールできた。もういいだろう。これでダメなら、私がダメなのだ。